

主題：クライアントの変容を促す医療ソーシャルワーカーの働きの研究（その2）**―副題：先行研究との対比による実践理論モデルとしての位置づけを探る―**

○ 高槻市富田南・下田部地域包括支援センター

氏名 高柳 雅仁（7857）

キーワード3つ：ソーシャルワーク実践モデル、クライアントの変容、エンパワーメント・アプローチ

1. 研究目的

ソーシャルワーカーがクライアントを支援行っている時に、クライアントが自らの問題を積極的に受け止め、これを自らの力で解決しようとする取り組みが始めるときがある。このクライアントの変容はなぜ起こるのか。なぜクライアントは元気になるのか。ソーシャルワーカー共に解決の道筋を辿ろうとする力の基はどこにあるのか。

この問いをもって筆者は先にソーシャルワーク過程におけるクライアントの変容を分析してきた。クライアントやソーシャルワーカー、そしてこれに係る第三者の視点も加味したインタビューの解析を大野らが提唱する生活アセスメントのツールを援用した分析手法にてクライアントの変容を捉え、その原因を考察し、変容に係る4つのポイントを導き出した。生命・身体の安全、コミュニケーションの回復、大切な人の存在、自己選択の自信である（日本社会福祉学会第58回秋季大会にて発表）。

この度、この変容の視点について論じる先行研究を探索し、筆者の述べる4つのポイントの実践モデルにおける位置づけを探ってみることとした。以下がその方法と結果である。

2. 研究の視点および方法

クライアントの変容に係る研究は、ソーシャルワーク実践理論のカテゴリーに含まれると考えられる。そこでソーシャルワークの実践理論的研究が蓄積されているとおもわれる学会の研究誌から先行研究の分析を行うこととした。

学会の研究誌としては日本ソーシャルワーク学会（旧日本社会福祉実践理論学会）の発行する学会誌がソーシャルワーク実践理論における中心的な研究誌ではないかと考えられる。そこでこの学会誌の発行されたすべての号に掲げられた論文を対象としてクライアントの変容を論ずるものを探索した。一覧表として論文の発行年度とテーマ、語られる中心課題及び機能モデルを表記した。その課題の中に変容の4つのポイントを示す欄を設け、それぞれのポイントに適合する内容が示されていればその内容を記入できるようにした。これによって今回、筆者が示した4つのポイントに近い理論が先に示されているか否かを見出す事が可能となる。また、4つのポイントとは異なった理論を表記し、分析の整理が行えるようにその他の欄を3つ設け、其々にミクロ、メゾ、マクロの視点で論ずるもの記載が出来るようにした。

3. 倫理的配慮

すべて、本研究に係るデータは厳重にこれを管理し、適切な保管を行っている。併せて、

先に行った質的研究の基礎データとなったインタビューにおける個人に係るデータの利用については書面によって説明と同意を得、適切な管理を行っている。この他の点においても学会研究倫理指針に定められた内容に従い、厳重な運用を行っている

4. 研究結果

別紙一覧表のようになった（別紙参照）。

今回、探索対象とした論文及びそれに準ずる研究文献の全本数は106であった。そのうち、変容の4つのポイントと近い理論の表記がなされている論文は2つであった。

①1996年10月第5号に掲載されている石河久美子の「異文化のクライアントへの対人援助—在日外国人妻の問題を中心に—」というものと、

②2000年6月第9号に掲載されている狭間香代子の「エンパワーメント・アプローチにおけるストレングスの視点の意味」であった。

5. 考察

①においては主に、コミュニケーションの回復や大切な人の存在、に一致するところが見られている。②についてはエンパワーメント・アプローチの進展段階として語られている「自己効力感」「自己意識」「自尊心」「自己統制」等は変容の4つのポイントとどこか類似するところのある理論表記であるとも思われた。

①のような事例を基にした研究においては変容の4つのポイントのすべてまたはその一部が、事例に示される援助過程において、クライアントの変容が示されるポイントと考えられるところにおいては一致をみる場合が考えられる。しかし、先行研究において示された実践モデルにおいて一致が考えられる点が見られるとすると、すでに示されている実践理論の下位部分である実践モデルのある部分を示している可能性があるということを否定できない（芝野 2011）。すなわち、エンパワーメント・アプローチという実践理論において、今回の変容の4つのポイントは実践事例から読み解いた実践理論を説明する実践モデルの一つであるという理解である。

ただし、現段階での分析では、変容の4つのポイントとエンパワーメント・アプローチの過程がすべて一致したとの確定には至っていない。今、少し、先行研究における実践モデルに係る文献の更なる分析を行い、両者の関係を比較していく事が求められる。

参考文献

- ・(1995～1996)『日本社会福祉実践理論学会研究紀要』第1号から第5号・(1998～2009)『社会福祉実践理論研究』第7号から第18号・(2010～2011)『ソーシャルワーク学会誌』第19号から第22号・芝野松次郎(2011)「ソーシャルワークの実践と理論をつなぐも—実践モデル開発のすすめ—」『ソーシャルワーク学会誌』第23号 pp.1～17
- ・石河久美子(1996)「異文化クライアントへの対人援助—在日外国人妻の問題を中心に—」『日本社会福祉実践理論学会研究紀要』第5号 pp.34～42
- ・狭間香代子(2000)「エンパワーメント・アプローチにおけるストレングス視点の意味」『社会福祉実践理論研究』第9号 pp.65～74
- ・大野勇夫・川上昌子・牧洋子編(2009)「福祉・介護に求められる生活アセスメント」中央法規